

平成26年6月23日 府議会におけるスタジアムに関する知事発言 (インターネット中継録画より作成)	知事発言に対する質問	京都府の回答(2014. 7. 22)
<p>京都スタジアムの整備でありますけれども、アユモドキの保全との両立についてですが、まずご理解いただきたいのは、アユモドキというのは、現状の環境の中では生息できなかったのであろうということでもあります。それを、今も、現在もこの地で生息しているのは、長年に渡って地元の市町村や、住民の皆さんの献身的な取り組みがあったからであり、それを京都府も積極的に支援してきたからということでもあります。</p> <p>具体的には、地元住民や、学識経験者、府、亀岡市等が平成17年に保全協議会を設立しまして、産卵に必要なラバーダム起立時期の調整や、産卵場の草刈りや清掃を行ってきた。ダム起立後は、遡上できないアユモドキの救出活動行ってきた。そして密漁防止パトロール、外来魚の駆除、啓発活動などの取り組みを一丸となって実施して、ほんとうに亀岡全体で守ってきた、ということを私たちは思い起こさなければならぬと思います。</p> <p>多くの地では既に全滅をさせておいて、そして、まさに地元の必死の努力で我々は守ってきた、こうした亀岡の歴史、これを知らないままですね、一方的に意見を送りつけてくるという例もありまして、これは私は地元に対して本当に失礼だというふうに思っております。</p> <p>スタジアムの整備というのは、こうした地元の方々の地域の将来を思う形で、いま両立について一所懸命努力しているのでありまして、まさにアユモドキを保護保全してきたことを地元が後悔するような形になってしまっは、何のための私は自然保護か、これが今問われているのではないかなというふうに感じている次第であります。</p> <p>このため、現在、環境保全専門家会議の助言を得て、実態調査、実証実験、対策の検討などを行っておりまして、自然と共生するスタジアムの実現に向けて、京都府も全力を挙げて取り組んでいきたいというふうに思っているところであります。今後、実施設計に着手し、29年度末の完成を目指して、府民の皆さんの熱い思いを受け止め、しっかりと整備に取り組んでまいります。</p>	<p>1) 現在の河川に今もアユモドキが生息している理由について、かつて亀岡において多く生息していたアユモドキが、年々少なくなってきたことを地元市町村や住民の皆さんが気付かれ、何とかしなければと検討され、地元が現在の生息河川を選定し、そこで自発的に保護活動に取り組まれたところ、それが功を奏して、今もその河川で生息しているという、そういうご認識でしょうか。</p> <p>2) 意見を送りつけてきた学会や諸団体等が、アユモドキを全滅させたというふうに理解できませんが、間違いはないでしょうか。</p> <p>3) なぜ、地元のアユモドキ保全活動が、スタジアム整備をしないと、何のための保全活動かと問われるのか、お教え下さい。</p>	<p>アユモドキは、かつては桂川及びその支川に広く分布していましたが、20年ほど前には見られなくなり、現在では、その下流の亀岡駅付近の桂川水域において確認される状況となったものと考えられます。</p> <p>亀岡市においてアユモドキが現在生息しているのは、自然のままでは生息ができないと考えられる中で、地元住民や学識経験者、亀岡市、京都府が平成17年に保全協議会を設立し、多くの皆さんの暖かい御支援のもと、地域全体が一丸となって取り組んできた大きな成果と考えております。</p> <p>具体的なアユモドキ保全の取組ですが、ラバーダム起立後救出活動、「中干し」救出活動、9月の稲刈り時期前の救出活動など、多大な地元の方々などの労力により、保全が成り立っているところと考えております。平成15年度からは、アユモドキの調査活動、平成17年度から保津町自治会が密漁パトロールを実施、平成19年度に生息域約400mの区間を禁漁区に指定、平成20年には外来魚駆除活動実施し、アユモドキの保全に効果を上げております。京都府は、平成20年度からアユモドキ生息状況調査などの活動に助成を毎年実施、河川管理者においては、河川環境整備の改善を学識経験者の意見を聴きながら、可能な限りの対策を工夫して実施してきたところです。</p> <p>このような地元の献身的な取り組みに十分な評価を頂くことが必要であると考えており、是非とも地元の方々への地域活性化と両立・共生するアユモドキ保全活動を展開すべきだと考えております。</p> <p>スタジアム整備は、府民・市民の共通の願いであると同時に、アユモドキも未来へ伝えるべき貴重な自然財産であります。そのため、現在、環境保全専門家会議の指導・助言を得て、実態調査、実証実験、対策の検討等、実質的なアセスメントを実施しているところであり、今後ともスタジアム整備とアユモドキ保全の両立を図り、「自然と共生するスタジアム」計画を推進していく所存です。</p>